

【 主日アポリティキオン 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降

とき、かみのせいひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄

くをころせり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地 下

りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆

よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼 日 生 命 賜 主

ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 爾

き 歸 す。

【 攜香女主日トロパリ 第2調 】

とおときイオシフはなんぢのいさぎよきみをき
尊 爾 潔 身 木

よりおろし、きよきぬのにつつみ、こう
下 淨 布 裹 香

りょうにておおい、あらたなるはかにおさめ
料 覆 新 墓 藏

た 然 り、しかれどもしゅよ、なんぢは
然 主 爾

みつかめにふくかつし、せかいにおおい
 三日目復活世界大
 なるあわれみをたまえり。
 憐 賜

【 三歌頌のコンダック 第2調 】

こうえいはちちとことせいしんにき
 光榮父子聖神歸
 す、

ハリストスかみよ、なんぢはふくかつにより
 神 爾 復 活 藉
 て、けいこうぢよによろこべよとつげ、
 攜 香 女 慶 告
 げんぼエヴァのかなしみをとどめ、なんぢ
 原 母 悲 止 爾
 のしとにつたえんことをめいじたり、きゅう
 使 徒 傳 命 救
 せいしゅははかよりふくかつせりと。
 世 主 墓 復 活 せ り と 。

【 パスハのコンダック 第8調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世

しせざるハリスト スか みよ、なんぢは はかにく
死 神 爾 墓 降

だれども ぢごくのちからをやぶり、か勝
地 獄 力 破 勝

つものとしてふくか つせり、けいこう
者 復 活 携 香

ぢよによろこべよとい い、なんぢのしとにへ平
女 慶 言 爾 使 徒 平

いあんをあたえ、ほろびしものにふく
安 與 亡 者 復

か 活 つをたまえり。

【 聖三の歌 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
主 敬 虔 者 救 及 我

らにききたまえ。
等 聆 給

代禱) ^{よよ}世世に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者我等を憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるかみ、聖なる勇毅、聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常生者我等を憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖なるかみ、聖なる勇毅、
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 常生者我等を憐
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん
 光栄は父子聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸今何時世世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 常生者我等を憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖なるかみ、聖なる勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 聖常生者我等を
 あわれめよ。

【 提綱 (プロキメン) 第6調 】

代禱 ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾の民を救い、^{なんぢ}爾の業に^{ぎょう}福を降し^{ふく}給え、^{くだ}たま

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ}主よ、^{われなんぢ}我爾に呼ぶ、^{われ}我の^{かため}防固よ、^わ我が^{ため}爲に^{もだ}黙す^{なか}母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたまえ。
爾 業 福 降 給

【 使徒經 (アポストロス) 16 端 聖使徒行實 6 章 1 節~7 節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ}聖使徒行實の^{よみ}讀、

代禱) ^{つつし}謹^きみて聽くべし、

誦經) ^か彼の^ひ日、^{もん}門徒^{ます}益^{ます}加わりしに、^{じん}エリニストが^{たい}エウレイ人^{うらみごと}に對して^{かれ}怨言せしことあり、彼

^ら等の^{やもめ}妾^{ひび}が^{ほど}日日の^{こし}施濟^{おい}に於て^{かる}輕んぜられし^{ゆえ}故なり。^{じゅうに}十二の^{しと}使徒は^{たいすう}大數の^{もんと}門徒を^{まね}招きて

^い日えり、^{われら}我等^{かみ}神の^{ことば}言^おを^{しよくたく}舍きて、^{こと}食^{つと}卓の^{よる}事を^{ゆえ}務むるは、^{けいてい}宜しからず。^{なんぢ}故に^{兄弟}兄弟よ、^爾爾

^ら等の中より、^{うち}善^よき^{あかし}證^えを得、^{せいしん}聖神と^{ちえ}智慧とに^み満てられたる^{もの}者^{しちにん}七人を^{えら}撰べ、^{われら}我等^{これ}之を^た立てて、

^こ此の^{こと}事を^{つかさど}司らしめ、^{われら}我等は^{もつば}専ら^{きとう}祈禱と^{でんきょう}傳教とを^{つと}務めん。此の^こ言は^{ことば}衆民に^{しゅうみん}悦ば

^{れて}、^{つい}遂に^{しん}信と^{せいしん}聖神とに^み満てられたる^{ひと}人、^{また}ステファン、^{また}又^{フィリップ}フィリップ、^{プロホル}プロホル、^{ニカノル}ニカノル、

^{ティモン}ティモン、^{パルメン}パルメン、^{およ}及び^{しんきょうしや}アンティオヒヤの^{えら}進教者^{ニコライ}ニコライを^{これ}之を^{しとら}使徒等の^{まえ}前に^た立

かれらきとう て そのうえ の かみ ことばますますちよう もんと すうはなはだ
て、彼等祈禱して、手を其上に按せたり。神の言 増 長じ、門徒の數 甚 イエル

ぞうか さいし うち おお おしえ したが もの
サリムに増加し、司祭の中にも多く 教に 順いし者あり。

(比較用 口語訳) そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた。そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろくない。そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」。この提案は会衆一同の賛成するところとなった。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、それからピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、およびアンテオケの改宗者ニコラオを選び出して、使徒たちの前に立たせた。すると、使徒たちは祈って手を彼らの上においた。こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受け入れるようになった。

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 第8調 】

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾は^{すで} 已に^{あわれみ} 憐を^{なんぢ} 爾の^ち 地に^{ほどこ} 施し、^{とりこ} イアコフの^{かえ} 俘を^{かえ} 歸せり、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{じれん} 慈憐と^{しんじつ} 眞實と^{あいまじわ} 相交り、^ぎ 義と^{わへい} 和平と^{あいせつぶん} 相接 吻せん、

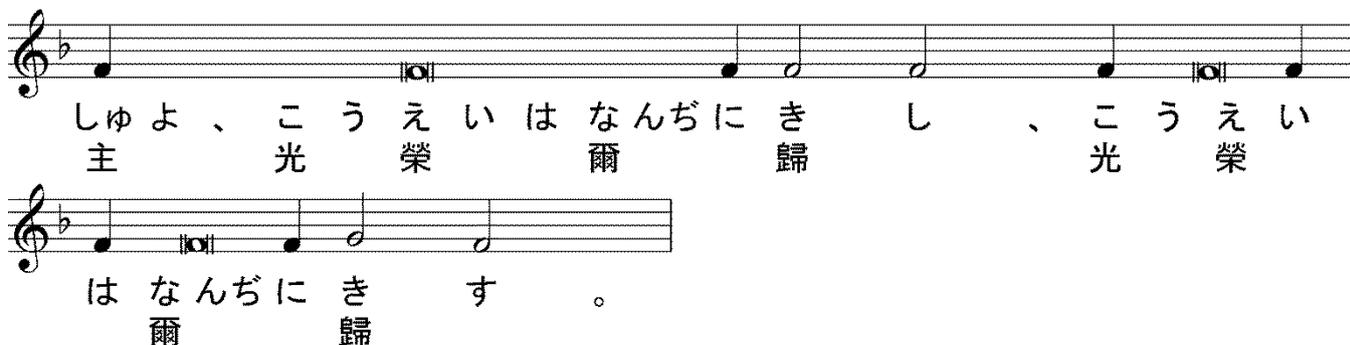
アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書 69 端 15 章 43 節～16 章 8 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) マルコ ^{でん} 傳の ^{せいふくいんけい} 聖福音經の ^{よみ} 讀、



代禱) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^か 彼の ^{とき} 時、^{ひと} アリマフェヤの ^{ひと} 人イオシフ、^{とうと} 貴 ^{ぎし} き議士、^{みづか} 自 ^{かみ} らも ^{くに} 神の ^ま 國を ^{もの} 俟 ^{きた} てる ^き 者は ^き 來り、^き 毅

^{ぜん} 然として ^{もと} ピラトの ^い 許に入りて、^{しかばね} イイススの ^{もと} 屍 ^{そのすで} を ^し 求めたり。 ^{あやし} ピラト其 ^{あやし} 已に ^{あやし} 死せしを ^{あやし} 奇 ^{あやし} み、

^{ひやくふちょう} 百 ^め 夫 ^{かれし} 長 ^{ひさ} を ^と 召して、^{ひやくふちょう} 彼 ^{これ} 死して ^{しかばね} 久 ^{しかばね} し ^{しかばね} き ^{しかばね} か ^{しかばね} と ^{しかばね} 問 ^{しかばね} い、^{ひやくふちょう} 百 ^{これ} 夫 ^し 長 ^{しかばね} より ^{しかばね} 之 ^{しかばね} を ^{しかばね} 知 ^{しかばね} りて、^{しかばね} 屍 ^{しかばね} を ^{しかばね} イオシ

^{あた} フに ^{かれ} 與 ^{ぬの} へたり。 ^か 彼は ^{これ} 布 ^{おろ} を ^{ぬの} 買 ^{つつ} い、^{これ} 之 ^{いわ} を ^{うが} 下 ^{はか} して ^お 布 ^{いし} に ^{いし} 裏 ^{いし} み、^{いし} 之 ^{いし} を ^{いし} 磐 ^{いし} に ^{いし} 鑿 ^{いし} ち ^{いし} たる ^{いし} 墓 ^{いし} に ^{いし} 置 ^{いし} き、^{いし} 石 ^{いし} を

^{はか} 墓 ^{もん} の ^{まるば} 門 ^{およ} に ^{およ} 轉 ^{およ} せり。 ^{およ} マリヤ ^{およ} マグダリナ ^{およ} 及 ^{およ} び ^{およ} イオシヤ ^{およ} の ^{およ} 母 ^{およ} マリヤ ^{およ} は ^{およ} 彼 ^{およ} を ^{およ} 置 ^{およ} きた ^{およ} たる ^{およ} 處 ^{およ} を ^{およ} 見 ^{およ} たり。

^{スポタス} ス ^{およ} ポ ^{およ} タ ^{およ} ス ^{およ} 安 ^{およ} 息 ^{およ} 日 ^{およ} 過 ^{およ} ぎ ^{およ} て、^{およ} マリヤ ^{およ} マグダリナ、^{およ} イアコフ ^{およ} の ^{およ} 母 ^{およ} マリヤ、^{およ} 及 ^{およ} び ^{およ} サロミヤ、^{およ} 香 ^{およ} 料 ^{およ} を ^{およ} 買 ^{およ} いたり、

^ゆ 往 ^ゆ きて ^ゆ イイスス ^ゆ に ^ゆ 覺 ^ゆ ら ^ゆ ん ^ゆ 爲 ^ゆ な ^ゆ り。 ^ゆ 七 ^ゆ 日 ^ゆ の ^ゆ 首 ^ゆ の ^ゆ 日 ^ゆ 甚 ^ゆ 早 ^ゆ く、^ゆ 墓 ^ゆ に ^ゆ 來 ^ゆ る、^ゆ 日 ^ゆ の ^ゆ 出 ^ゆ づ ^ゆ る ^ゆ 頃 ^ゆ な ^ゆ り。

^{あいかた} 相 ^{あいかた} 語 ^{あいかた} り ^{あいかた} て ^{あいかた} 曰 ^{あいかた} え ^{あいかた} り、^{あいかた} 誰 ^{あいかた} か ^{あいかた} 我 ^{あいかた} 等 ^{あいかた} の ^{あいかた} 爲 ^{あいかた} に ^{あいかた} 石 ^{あいかた} を ^{あいかた} 墓 ^{あいかた} の ^{あいかた} 門 ^{あいかた} より ^{あいかた} 移 ^{あいかた} さん。 ^{あいかた} 目 ^{あいかた} を ^{あいかた} 舉 ^{あいかた} げて、^{あいかた} 石 ^{あいかた} の ^{あいかた} 已 ^{あいかた} に ^{あいかた} 移 ^{あいかた} さ

^み れ ^み たる ^み を ^み 見 ^み る、^み 蓋 ^み 其 ^み 石 ^み は ^み 甚 ^み 大 ^み な ^み り。 ^み 彼 ^み 等 ^み 墓 ^み に ^み 入 ^み りて、^み 白 ^み 衣 ^み を ^み 衣 ^み たる ^み 少 ^み 者 ^み が ^み 右 ^み の ^み 方 ^み

^ぎ に ^ぎ 坐 ^ぎ せる ^ぎ を ^ぎ 見 ^ぎ て ^ぎ 駭 ^ぎ け ^ぎ り。 ^ぎ 彼 ^ぎ は ^ぎ 之 ^ぎ に ^ぎ 謂 ^ぎ う、^ぎ 駭 ^ぎ く ^ぎ 勿 ^ぎ れ、^ぎ 爾 ^ぎ 等 ^ぎ は ^ぎ 十 ^ぎ 字 ^ぎ 架 ^ぎ に ^ぎ 釘 ^ぎ せ ^ぎ ら ^ぎ れ ^ぎ し ^ぎ ナ ^ぎ ザ

^レ ト ^レ の ^レ イ ^レ イ ^レ ス ^レ ス ^レ を ^レ 尋 ^レ め、^レ 彼 ^レ は ^レ 復 ^レ 活 ^レ して、^レ 此 ^レ に ^レ 在 ^レ ら ^レ ず、^レ 觀 ^レ よ、^レ 此 ^レ は ^レ 彼 ^レ を ^レ 置 ^レ き ^レ し ^レ 處 ^レ な ^レ り。 ^レ 往 ^レ き

^{そのもんとおよ} て、^{そのもんとおよ} 其 ^{そのもんとおよ} 門 ^{そのもんとおよ} 徒 ^{そのもんとおよ} 及 ^{そのもんとおよ} び ^{そのもんとおよ} ペ ^{そのもんとおよ} ト ^{そのもんとおよ} ル ^{そのもんとおよ} に ^{そのもんとおよ} 語 ^{そのもんとおよ} げ ^{そのもんとおよ} て ^{そのもんとおよ} 言 ^{そのもんとおよ} え、^{そのもんとおよ} 彼 ^{そのもんとおよ} は ^{そのもんとおよ} 爾 ^{そのもんとおよ} 等 ^{そのもんとおよ} に ^{そのもんとおよ} 先 ^{そのもんとおよ} だ ^{そのもんとおよ} ち ^{そのもんとおよ} て ^{そのもんとおよ} ガ ^{そのもんとおよ} リ ^{そのもんとおよ} レ ^{そのもんとおよ} ヤ ^{そのもんとおよ} に ^{そのもんとおよ} 往 ^{そのもんとおよ} く、^{そのもんとおよ} 爾 ^{そのもんとおよ} 等 ^{そのもんとおよ} 彼 ^{そのもんとおよ} 處 ^{そのもんとおよ} に ^{そのもんとおよ} 於 ^{そのもんとおよ}

^{かれ} て ^{かれ} 彼 ^{かれ} を ^{かれ} 見 ^{かれ} ん、^{かれ} 其 ^{かれ} 爾 ^{かれ} 等 ^{かれ} に ^{かれ} 言 ^{かれ} い ^{かれ} し ^{かれ} が ^{かれ} 如 ^{かれ} し ^{かれ} と。 ^{かれ} 婦 ^{かれ} 急 ^{かれ} ぎ ^{かれ} 出 ^{かれ} て ^{かれ} て、^{かれ} 墓 ^{かれ} より ^{かれ} 奔 ^{かれ} り、^{かれ} 戦 ^{かれ} き ^{かれ} 且 ^{かれ} つ ^{かれ} 驚 ^{かれ} き

^{いちごん} て、^{いちごん} 一 ^{いちごん} 言 ^{いちごん} も ^{いちごん} 人 ^{いちごん} に ^{いちごん} 語 ^{いちごん} げ ^{いちごん} ざ ^{いちごん} り ^{いちごん} き、^{いちごん} 懼 ^{いちごん} れ ^{いちごん} し ^{いちごん} が ^{いちごん} 故 ^{いちごん} な ^{いちごん} り。

(比較用 口語訳) アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。そして、百卒長から確かめた上、死体をヨセフに渡した。そこで、ヨセフは亜麻布を買い求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。そして週の初めの日に、早朝、日の出のころ墓に行った。そして、彼らは「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」と話し合っていた。ところが、目をあげて見ると、石はすでにくらがしてあった。この石は非常に大きかった。墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去った。そして、人には何も言わなかった。恐ろしかったからである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸 す。

※代式祈祷③ へ